

## 小磯内閣から鈴木内閣へ

戦局はますます悪化、  
小磯内閣は総辞職へ

せまりくる戦争経済の崩壊

昭和19年7月、東条内閣打倒の後をうけて成立した小磯内閣であったが、昭和天皇の戦争継続の意思がかわらないこともあって、結局は東条政権がしいた戦争継続路線をそのまま踏襲する。だが、戦局は悪化するばかりで、10月の台湾沖航空戦では残余の航空戦力の大半を失い、さらには「天王山」と称したフィリピンのレイテ沖海戦でも連合艦隊が壊滅状態におこまれる。

こうするうちにも、アメリカ軍による日本本土空襲は、昭和20年の3月から本格化する。なかでも3月10日の東京大空襲を皮切りに、これより一〇日間で延べ一五九五機の爆撃機が名古屋、大阪、神戸の各都市に合計九三三七三トンの焼夷弾を投下。四都市で約一二平方キロを焼きはらった。

これらの大都市への爆撃は、民衆の戦意喪失をねらったものだった。これ以後空襲の目的は軍需工場や鉄道・港湾施設など、戦争経済をささえる全国にちらばった諸施設の破壊に照準がさだめられていく。

「米国防略爆撃調査団報告」によると、日本全国六六の地方都市に合計一〇万四〇〇〇トンの爆弾が投下されと記録している。これにくわえて航空機工場に一万四一〇〇トン、精油工場に一万六〇〇〇トン、各種工業施設に三五〇〇トン、陸海軍工廠に一万四一五〇トンの爆弾が投下された。

この結果、爆撃をうけた六六都市の四三%が破壊され、各種の諸工場もほぼ同程度の破壊をこうむり、戦争経済は確実に崩壊していった。それに国民の三分の二が空襲を体験することになり、約九〇万人の犠牲者および約一三〇万人の負傷者をかぞえ、多くの貴重な工場労働力をも喪失する。同時に八五〇万人以上の国民が空襲被害により疎開を強いられることになった。

これより先、「絶対国防圏」の崩壊と前後して重要資源の日本への搬入は事実上すでに途絶しており、空襲による破壊とあわせて日本の戦

\*1 今井清一編『ドキュメント昭和史 5 敗戦前夜』平凡社、一九七五。

\*2 経済安定本部総裁官房企画部調査課編『都道府県別建物直接戦争被害戸数』(一九四八年五月刊)によると、被害総数二三六万一九〇六戸のうち九三%にあたる二一八万八二八戸が全焼とある。

\*3 藤原彰編『日本民衆の歴史9 戦争と民衆』三省堂、一九七五。

\*4 同前

\*5 栗屋憲太郎・川島高峰編集解説『国際検察局押収重要文書① 敗戦時全国治安情報』第7巻、日本図書センター、一九九四。

\*6 34ページ参照。

争経済は、もはや戦争継続を不可能とさせるところまでできていたのである。

### 民衆の犠牲とたかまる厭戦気運

空襲により甚大な被害をこうむった民衆は、恐怖心をいだきながら、戦争指導層への不信感をもつらせていくことになった。すでに日本の敗色が濃厚となりつつあった東条内閣末期からは、長期にわたる戦時体制のなかで上からの締めつけと食糧難による生活不安を背景に、厭戦気運<sup>4</sup>がたかまっていた。昭和19年度における「流言飛語」<sup>5</sup>は、全国の憲兵隊があつかっただけでも六二三三件にたつする。

そして、空襲被害が本格化する昭和20年にはいると、たとえば「此の間の空襲に日立航空では死者三百名を出したそうだ。何でも日立が一番やられたそうだが軍はやられたり負けたり一つも発表しない。だから新聞では解らない<sup>6</sup>」(2月19日、東京都、陸軍航空工廠工員、N・S、二九歳<sup>4</sup>)との認識をしめす者があらわれる。これは大本営発表による情報をまったく信用せず、民衆自身が空襲を直接体験し、見聞するなかで空襲被害の実態や日本がおかれた現実を

直視するようになってきたことをしめすものであった。

さらに、「今の状態で行けば日本は大変不利な戦争をして居る様で此の状態が進めば日本は負けはしまいか、若しソ連でも敵と云ふ事になると空襲はより以上にひどくなると思ふが今の内にソ連と提携するがよい(7月19日、大分県、男性・農業、五一歳)」との発言をなす者があつた。

このように冷静な時局分析と、戦争指導層への明らかかな不満をのべる事例が当局によって記録されている<sup>5</sup>。

この間にも小磯内閣は、「和平工作」(繆斌工作<sup>6</sup>)の是非をめぐる閣内対立で総辞職する。小磯を継いだ元侍従長で海軍大将の鈴木貫太郎<sup>7</sup>は、4月7日、組閣直後のラジオ放送で、「私の屍を踏み越えて起て」と国民にむけて徹底抗戦をよびかけ、さらに5月3日には「国民も特攻の勇士の如くあれ」と檄をとばすばかりであった。(瀧川 厚)



鈴木貫太郎 (1867~1948)  
昭和20年4月7日、首相に。



小磯国昭 (1880~1950)  
陸軍大将。のちA級戦犯。

参考文献  
歴史学研究会編『同時代史  
1 敗戦と占領』青木書店、一九九〇。  
早乙女勝元『東京大空襲』岩波新書、一九七一。  
『昭和二万日の全記録7 廃墟からの出発』講談社、一九八九。